秋田・龍門寺茶畑遺跡

1 所在地　秋田県由利郡岩城町赤平字向山
2 調査期間　二〇〇二年（平14）七月～一〇月
3 発掘機関　秋田県埋蔵文化財センター
4 調査担当者　加藤　竜
5 遺跡の種類　石器製作跡・集落跡・墓跡
6 遺跡の年代　旧石器時代、縄文時代、近世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

龍門寺茶畑遺跡は、秋田県の日本海沿岸中央部に位置し、日本海に直進する衣川右岸に形成された段丘上に立地する。標高は二五～二九ｍである。遺跡の北西側に隣接する龍門寺は、近世・亀田藩主岩城氏の菩提寺であり、寛永五年（一六二八）の開基と伝えられる。

（羽後和田・本荘）

発掘調査は道路建設事業に伴うもので、調査面積は二四三〇㎡であった。調査の結果、旧石器時代の石器ブロック二カ所、縄文時代前期の竪穴住居・土坑、近世の土坑・溝・焼土遺構などが検出された。

近世の土坑ＳＫ二〇は、被熱した陶磁器が出土すること、堆積土に焼土・炭化物が多量に混入することから、建物の火災に伴う廃棄坑と見られる。また、大型の仏花器が含まれることから、仏教関連の建物が被災した可能性が指摘できる。

二点の木簡は、木製構造物を伴う土坑ＳＫ三〇から出土した。ＳＫ三〇は一辺二・六ｍの正方形で、底面までの深さは一・一五ｍ、周壁の立ち上がりは垂直に近い。平坦な底面直上には、一・八ｍ四方に幅〇・三ｍの板を六枚敷き、その中央上には六角形の木組みを乗せている。これらの状況から、本土坑は、輿状の木製装具を伴う土葬墓と推測されるが、骨片や副葬品はなく、埋葬部は改葬を受け、完全に抜去されたと考えられる。ただし、陶磁器類など時期判定の根拠となる遺物は一切なく、帰属時期は不明である。

8　木簡の釈文・内容

(1)　311×29×27　061
「小〔縁カ〕□□□□。」

(2)　(230)×17×8　061
「板□□□□」

(1)は六角形の木組みに使用された角材で、墨書は下の板敷き部分と接する面に記入され、人名の可能性もある。下端部には釘穴が認

められる。

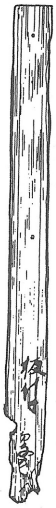
(2)は板敷き部に使用された薄い板材である。

木簡の釈読は、山形大学の三上喜孝氏のご教示による。

9　関係文献

秋田県教育委員会『龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡』(二〇〇四年)

(高橋　学〈秋田県払田柵跡調査事務所〉)



(2)

(1)